

公益財団法人 笹川平和財団
アジア・イスラム事業グループ
東京外国語大学ペルシア語専攻4年
金子瑠香
2025年度イラン短期研修プログラム報告書

1. 概要

私は、2026年2月3日から8日にかけて、公益財団法人笹川平和財団主催「イラン短期研修代替・周辺国理解促進プログラム」に参加した。当初予定されていたイラン短期研修は、2025年12月末に発生したイラン国内での抗議デモの影響により中止となったが、代替研修としてオマーンおよびカタールを訪問する機会を得た。

現地では、大学やシンクタンクなどの学術機関、博物館、日本大使館や日本企業等を訪問した。また、カタールで開催された第17回アルジャジーラ・フォーラムにも2日間にわたって参加した。これらの経験から、政治、文化、経済といった多角的観点から両国およびイランを含む地域情勢を捉えることができた。

本報告書では、あえて特定のテーマに限定することはせず、研修を通じて得た所見を国ごとに述べる。なお、本報告の感想は個人による見解である。

2. イラン

2025年12月末、イランで大規模な抗議デモが発生した。同国では2022年9月にも、ヒジャブの不適切な着用を理由に拘束された女性の死亡事件を契機として、大規模デモが発生している。私は当時のデモ発生時にイランに滞在しており、情勢悪化に伴う帰国予定の変更を余儀なくされた経験がある。今回も国内情勢の不安定化により渡航を断念することとなった。しかし、時に渡航の可否さえ左右するイラン情勢に直面するたび、刻一刻と動くイラン社会の変化をこの目で見届けたいという思いはむしろ強まっていく。今回はその機会を見送ることとなったが、周辺諸国の視点からイランを捉える機会を得たことは予想外の収穫であった。

本研修中、カタールで教鞭を執るイラン人やヨルダン人のイラン研究者とお会いできたことは印象深い。アラブ圏では、イランは必ずしも肯定的な印象を持たれていないのが現実である。そのような中で、ジョージタウン大学カタール校の Mehren 教授の「イランとアラブの架け橋となる存在になりたい」という言葉は強く心に残った。

3. オマーン

在オマーン大使館にて、同国の外交政策について説明を受けた。興味深かったのは、オマーンは「全方位外交」を掲げ、イラン、フーシー派、中国、ロシア、ウクライナおよび米国など、対立関係にあるアクターそれぞれと良好な関係を構築している点である。

また、同国は仲介外交にも積極的であるが、その成果の大々的なアピールは避け、「静かな仲介」に徹している。それにより、イランなどの当事国から信頼を獲得してきた。この外交スタイルには、穏健なオマーン人の国民性とも通じる部分があると感じた。

同国の文化についても言及しておきたい。オマーンは古来より、インド、ペルシア、東アフリカ、さらにはローマ世界との交易を通じて、様々な文化を融合させた独自の文化を形成してきた。この歴史は現在の衣食住にも反映されており、本研修中にもその一端を垣間見ることができた。まず、オマーンの伝統的な帽子 Kumma は東アフリカの帽子 Kofia と形状や刺繍柄に共通点を持っていた。食文化にも、「Sambusa」やココナッツを用いた「Mchicha wa Nazi」など、東アフリカの影響が見られた。また、スルタン・カーブース・グランドモスクは他のアラブ諸国のモスクと異なり、花文様をあしらった木製の扉を用いており、ザンジバルの扉との類似性が見られた。さらに、オマーンのスークで乳香が売られているのをよく目にしたが、それはインドのスパイスや東アフリカのクローブなどと交換される主要な輸出品として、同国の交易を支えてきた産物である。

4. カタール

カタールではアルジャジーラの本社や関連施設を訪問し、アルジャジーラ・フォーラムに参加した。ここでは、アルジャジーラに所属する重信メイ氏、フォーラム登壇者であるイランのアラグチ外務大臣、そしてフォーラムに参加していたパレスチナ人からの話をまとめたい。

アルジャジーラ関連施設では、重信メイ氏からお話を伺った。彼女はジャーナリストとして「impartiality (弱者に焦点を当てること) が fairness (公平性) だと捉えている」と語り、そもそもニュースは選択の段階で既に偏っていると指摘した。また、「アルジャジーラはパレスチナを重点的に報道している」という一部の指摘がある中で、「我々がカタールに拠点を置く以上、パレスチナで起きている現実を全世界に伝える義務がある」と語った。この話を受け、ジャーナリズムの世界における「公平性」とは何かという問いを改めて考えさせられた。

また、フォーラムにて聴講したアラグチ外務大臣の言葉も印象に残っている。彼は「パレスチナ問題は、西アジア、さらには国際社会において、正義を決定づける問いである」と述べ、「パレスチナは単なる悲劇ではなく、世界の道徳的状態を映し出す鏡である」と続けた。この問題は、紛争当事国だけでなく国際秩序そのもののあり方を問うテーマであり、日本を含む各国がどのような立場から責任を持つのが試されていると感じた。

さらに、フォーラムにて複数人のパレスチナ出身者と出会ったことも思い出深い。カタールの大学で学ぶ女子学生は、私たちが日本からフォーラムに参加したことに強い関心を示し、感謝の意を伝えてくれた。アルジャジーラに所属する男性からは、「知ら

ないものは変えられない。世界を変えるには、今何が起きているのかを知ることから始まる。」と伝えられた。これらの経験から、たとえ遠い場所で起こっている出来事であっても、それを知ろうとする姿勢そのものが新たな一步に繋がるのだと感じた。今後もガザ情勢をはじめとした世界のニュースに継続的に向き合い、考え続けていきたいと強く思った。

5. 本研修の意義

本研修は、自身がこれまで無自覚に抱いていた「中東像」を問い直す契機となった。

今回訪れたマスカットとドーハでは、整然とした都市空間と落ち着いた人々を目にし、いわば「完成された都市」という印象を受けた。過去に別の中東諸国を訪れた際に感じた市場の喧騒や街の雑然とした空気をどこかで期待していた私は、その不在に戸惑いを覚えた。しかし、その違和感は都市の側にあるのではなく、たった3か国での滞在経験を基に自身が勝手に作り上げた「中東らしさ」、すなわち固定化された地域像に由来するものであったことに気づいた。

私は大学で中東地域を専攻してきたが、思い返せば中心に据えて学んできたのはイランおよび、いわゆる「アラブの心臓」と称される国々に関する事象であった。それだけで中東地域の多様性を理解したつもりになっていた過去の自分を恥じると同時に、自身の認識の枠組みを可視化することができた点で、本研修は非常に有意義なものであったと考える。

そもそも毛色の異なる国々を「中東」と一括りにすること自体が単純化を伴う。その前提を再確認できたことこそが、本研修における最大の学びであったと感じる。

6. 終わりに

最後に、本研修を通してお世話になったすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

まず、直前の要請にも関わらず暖かく迎え入れてくださった訪問先の関係者の皆様、そして研修中に多くの刺激を与えてくれた個性豊かな同期の仲間へ感謝したい。

そして、本研修を主催してくださった笹川平和財団の関係者様、とりわけ引率者の木村様およびワイエブ様に、最大限の敬意と感謝を表したい。イラン渡航が不可能となっても研修の中止という選択肢をとることなく、代替国での実施のために奔走していただいた。例年のイランの受け入れ先機関を頼れない中での、周辺諸国での訪問先の調整や関係構築、そして綿密な計画立てなど、その苦労は計り知れない。

本プログラムが今後も継続的に実施されることを心より願い、本報告の結びとする。